



二次元ドリームヘルズ 35

サンダー グループ 2

スカイ&シャドウ

小説 羽沢 向一

挿絵 せんばた楼

試し読み版

第一章	復讐の申し立て	006
第二章	女子アナ転生	028
第三章	アナウンサーの帰還	051
第四章	成人指定の議題	088
第五章	淫猥なる風の作用	114
第六章	異常者集合せよ！	149
第七章	闘士たちの淫らな競技会	191

登場人物紹介

Characters



スノーウィング

おおぞら みき
本名は大空美紀。元は新人アナウンサー。キャプテン・スカイとの出会いをきっかけにスーパーヒーローに。

セメタリー

なんじょうし の
本名は南條志野。伝説のヒーロー、ミスター・シャドウの娘。父親の能力を引き継いでいる。

シルバー・バレット

ジャスティス・サーカス
正義曲馬団のメンバー。超音速で闘う、日本最速のスピードスター。

マダム・スクロール

正義曲馬団のメンバー。様々な魔力を秘めた巻物を駆使する、神秘の麗人。

キャプテン・スカイ

正義曲馬団のリーダー。日本最初のスーパーヒーロー。

ミルククラウン

ダーク・アリーナを主催する犯罪組織のボス。

ストーリーテラー

他人の肉体を書き替えることだま言霊使い。

——こんな、街の真ん中で、男の人と下着だけで向かい合っているなんて……
もちろん四方を鉄の壁で囲まれたこの空間を覗けるのは、上空を飛ぶ鳥くらいだろうが、やはり普通ではありえない場所だ。

「……あ、あの、先に、脱いでください」

「いつしよにはだめかな？」

そう言つて、キャプテンの両手が、腰に食いこむサポーターの細いひもにかかった。

美紀は断れない。背中に手をまわして、ブラジャーのホックをはずした。危険物を扱うかのように、両手で白いカップをそつと取る。

美紀自身も少し大きかったらと思う乳房が、直接外気にさらされる。キャプテンのやさしくも熱い視線が、裸の胸にそそがれるのをはつきりと感じた。視線そのものにエネルギーがこもっているかのように、胸の内側がジリジリと燃えてくる。

——ああ、立ってる——

小さめの乳首は、すでに硬くしこっていた。白光の触手のせいだが、美紀は自分が淫らな女になった気がして、あわてて手で隠した。掌に乳首の先端がこすれて、甘い電流が胸から全身へ走ってしまう。

羞恥に身を焼く美紀の目の前で、キャプテン・スカイのサポーターが一気に下ろされた。

ゴムに引つかかっていたわんだ男根が、外に解放されて激しく跳ね上がる。

「ああ」

と、思わず美紀は驚嘆の声を洩らした。

鍛え上げられた肉体にふさわしい雄渾な逸物だ。以前に平和テレビのプロデューサーが年を取ると勃起の角度が下がるという下ネタ話をしていたが、六十代のキャプテンの剛棒はへそに密着するほど上を向いて、そびえたっている。もちろんかつての恋人のモノとは、長さも太さも比べものにならないかった。

——こ、これが、わたしの中に入るの！ 壊れてしまいそう——

美紀は不安に駆られたが、触手が送ってくる快感の連続には勝てなかった。あいかわらず胸にも股間にも触れてこないの、快楽が増えると同時に中途半端な焦燥感がつのっていく。

それでも、胸から手を動かすことはできなかった。自分でパンティを脱ぐことはできなかった。察したキャプテンが告げてくれる。

「下ろすよ」

「は、はい」

うなずく美紀の腰に、力強い手がそえられた。桃の薄皮を剥くように、白い下着が取り

払われる。

自分の秘所がすでに濡れていることに気づく前に、美紀はまた口を奪われた。

「んっう、んん……」

筋肉質の両腕が、何本もの触手の生えた背中にまわる。指が白い光の中を通り抜け、しっかりと美紀を抱きしめた。興奮と羞恥に張りつめた二つの乳房が、ぶあつい胸板に押しつけられて、柔軟に形をたわめた。

美紀の吐息が、キャプテンの口の中へ送られる。豪腕の内側に抱かれて、幼いころに父親に抱かれたときにも似た、言葉にできない安堵の感情が全身を満たした。しかし、美紀の肉体はもうなにも知らない幼女のものではないのだ。

キャプテンの両脚が屈した。スーパーヒーローの唇がゆつくりと顎をくだり、喉を伝って、鎖骨をくすぐった。肌を這う口の動きが、美紀の肉体を炙りたてる。

「は、ああ、うん……はあうっ！」

ひとときわ高く、美紀の喘ぎ声が放たれた。右の乳首をついばまれたのだ。身体中の全神経がその一点に集中したようだ。

「ひ、あ、ああ……」

——感じる。乳首がこんなに感じるなんて——

背筋が痺れ、腰がいうことを聞かなくなった。初めて知る鮮烈な胸の喜びが、美紀の両腕を無意識に男の身体に触れさせた。肩に盛り上がる筋肉を、十本の指が這いまわりつつける。

キャプテン・スカイは唇と舌だけを使って、女子アナの左右の乳首だけでなく胸全体をやさしく、しかし情熱的に、執拗に、愛撫をくりかえした。両手は美紀の細い背中にまわされたままだ。

「ふうつ、あ、んあ……」

美紀は乳房に与えられる快感に浸って、喘ぎ、よがり、全身をくねらせながらも、新たな刺激を求めずにはいられなかった。

「はああ、お、お願いです、健吾さん、し、下のほうも……」

それ以上は、美紀には言葉にできない。

——下も舐められるのかしら——

そう思うだけで、恥ずかしくて脳が沸騰する。そこを、口でされたことはない。間近に見られたこともなかった。思えば、かつての恋人とのときは、いつも部屋を暗くしていた。こんな晴天の下、あからさまな光の中でするなんて、考えもしなかった。

——自分でも見たことがないところを、キャプテンに見られてしまったら……——

美紀の不安を読んできた、キャプテンの顔は胸から動かなかつた。右手だけが背中をすべり、肌にとわりつく触手をかきわけて、ぴったりと閉じられた内腿に到達した。

汗でぐっしよりと湿った腿が、五本の指で巧みに刺激された。

「あはああ……」

美紀の筋肉がひくひくと震えて、自然に脚がゆるんだ。

——ああ、これが巧いということなのね——

経験の乏しい美紀にも理解できた。技巧はきつと豊富な経験に裏打ちされているに違いない。

——キャプテン・スカイはいままでには、何人の女性と経験があるのかしら——

世の中には芸能人やスポーツ選手のファンと同じく、スーパーヒーローの追っかけがたくさんいる。アメリカではプレイボーイを自称したあげくに、複数の女性から告訴されたスーパーヒーローもいたくらいだ。

銀座にあるジャスティス・サーカス本部ビルヘッドクォーターの前には、いつでも出待ち入り待ちの人々がたむろする。日本で一番有名なキャプテン・スカイなら、ひと声かければ喜んで裸になる女性が掃いて捨てるほどいるだろう。もちろんキャプテンがそんなことをするとは思えないが。

「はっ、んんっ！」

美紀の秘唇に、指先が触れた。緊張とともに恥丘を指で揉みほぐされる。

「ん、ううんっ……」

美紀は知らないうちに下唇を噛んでしまう。唇の端から苦しげにも聞こえる吐息がこぼれる。指で左右から押された恥丘の狭間から、果汁のように蜜が滴り、キャプテンの掌を濡らした。

「んっくう」

美紀はキャプテンの髪に顔を埋めた。昂った息が、スーパヒーローの髪を揺らす。自分自身の秘部のありさまは見えなかった。ただ、かつてない気持ちよさと、収まることのない疼きだけが、股間から駆け上がってくる。

「あ、あんっ、け、健吾さん、んむっ」

美紀の爪が、筋肉の束に食い入ろうとする。

英雄の太い左腕は、背筋の触手の中にあつた。男の顔は、胸を愛しつつづけている。キャプテンが右手の指先の感触だけで、美紀の花びらを開かせた。

「はああつ、健吾さんんっ」

熱い喘ぎと花蜜が、同時にどつと流出する。

美紀の花の内側に、正義を守りつづけてきた指が入ってきた。充血した肉壁を刺激しながら、花園の上に位置する肉の粒を探り当てる。

まだ未開発な美紀のクリトリスは、肉体が興奮しきった状態でも小さく、皮にしつかりと包まれていた。それでも快楽の期待に疼き、脈動している。

「はひっ！」

もつとも敏感な器官を、親指と人差し指でそつとつままれた。美紀の背筋が激しくそりかえる。

「ひ、んっ、くふうう！」

莢さやの上から、肉の真珠をこすられた。そりかえった身体が何度も前後に激しく揺れる。美紀の快楽の高まりにもなつて、背中の触手の光が強くなり、蠢きがすばやくなる。まるで触手自体も肉悦を味わい、楽しんでるようだ。

「ひっ、い、いっつ、気持ちいいですうっ！　こんなの、あつ、ああ、初めてですうっ！」
やさしい中にも緩急をつけた指の動きが、美紀を高みへと追いたてていく。美紀の顔も声もせつぱつまつたものに変化した。

「あうっ、うんん、くう、な、なにか、起きそうです……あああ、だめ、起きちゃう！　あつひいひいっつ！！」

美紀はひときわきつく背中をそらした直後に、がっくりとキャプテンの身体にしなだれかかった。股間が連続して痙攣し、秘孔から愛蜜が数回にわたって飛んだ。

「はあ、あああああ……………」

朦朧とする意識に、キャプテンのささやきが染みこんでくる。

「達したんだね」

「……………い、いまのが、そうなんですか？」

「そうだ。世にいうイクということだよ」

四十歳近く年上の男の言葉にうながされて、美紀は普通なら恥ずかしくて口にできないことを素直に答えた。

「わたし、はじめてです」

キャプテンに導かれた喜びを伝える。

「あ、でも…………」

美紀の身体が大きくなつた。まだ新たな女蜜が内腿を伝っている。

「まだ、足りないんだろう」

「そ、そんなことは」

「大空君のせいではないんだ。きみの身体と融合している翼のおかげだ。私はずっと体験

してきたのだから」

キャプテン・スカイがさわやかに笑いかけた。

「今度は、私も大空君とひとつになつていいかい？ そろそろ私も限界なんだ」

美紀はこくりと首を縦に動かした。キャプテンの顔にほっとした色が浮かぶと、二人の足もとの風雨にさらされて黒ずんだコンクリートをながめやった。

「ここでは、横になつてはできないな」

「えっ、でも、しかたないから、あつ！」

美紀の尻に、大きな掌がまわつた。そのまま、ひよいと裸体が持ち上げられる。美紀の両足が宙に浮く。

「年を食つたとはいえ、まだまだスーパーヒーローらしいところを披露しよう。ちよつと恥ずかしいポーズになつてしまふが、勘弁してくれよ」

美紀の尻たぶに当てられたキャプテンの両手が左右にずれた。両方の太腿をつかまれ、股を大きく開かされる。

「ええっ、あ、ああ！」

割り開かれた女子アナの股間が、スーパーヒーローのへその上に移動した。すぐ下には、そそり立つ巨根の亀頭部分が待ち構えている。美紀はたまらず、男の首に両腕をまわして

しがみついた。キャプテン・スカイがなにをするつもりなのか、想像はついた。

——だけど、そんなことが、本当にできるの？——

ゆつくりと、女体が下ろされた。大きく張った亀頭が、美紀の肉花に触れる。

「あうんっ！」

痺れる快樂とともに、美紀の内部へ正義の味方の男性器が入ってきた。圧倒的な存在感に、美紀は息を呑んだ。視覚ではなく、触覚だけで知るその大きさは、何倍にも巨大化して感じられる。

一度頂点に達した肉洞は、きついながらも剛直を受け入れていく。密着した膣壁をこすり上げられる感覚が、美紀を陶醉させる。

「あふっ。あ、あん、はあっ！」

キャプテンの手が離れた。重力に従って、さらに美紀の奥深くまで挿入された。

「あ、ああ、すごい！」

いま、美紀の身体は股間の接合部だけで支えられていた。足は完全に床から離れて浮いている。なんと、大人の女性の体重を、キャプテン・スカイは勃起力だけで持ち上げているのだ。

美紀は体内が完全に満たされていると感じた。自分の皮膚の一枚下には、キャプテンの

男根があると錯覚してしまうほどだ。いままで失っていたことすら気づかなかった大事なものが、怒濤の波となって戻ってきたようだ。

「大空君、いくよ」

キャプテンが一度自分の剛力を誇示すると、再び美紀の尻に手を当て、腰を突き上げた。肉棒の上下に合わせて、両手も尻肉をこねるように動き、美紀の腰をうねらせる。二つの動きが重なり合って生まれる複雑なリズムに、美紀はたちまち翻弄され、歓喜の嵐に吹き上げられた。

「あああつ！　いいっ！　すごいです！」

「大空君もすてきだ」

看板の中に歓呼を反響させる美紀に対して、キャプテンは冷静に聞こえる言葉を返した。しかし、美紀の中で暴れる肉棒は興奮の熱を放ち、さらに女体を燃え上がらせている。

わずかな時間で、再び美紀は頂点に登りつめていった。いつの間にかキャプテンの腰にまわされていた美紀の両脚が、きつく締まった。相手の腰を支えにして、自分からも積極的に身体を揺すりたて、無意識により深くつながろうとする。

「ああつ、また、また、イキそうです」

「ああ、私もだ」



美紀は悲鳴を上げて、露出した自分の胸を両手で隠そうとした。だが、両方の手首を、すばやく動いたストーリーテラーの左手につかまれ、そのまま頭の上へ掲げられてしまう。美紀はソファの上に座ったまま、頭上へまっすぐのばした両腕の手首を無理やりに交差した形にさせられた。自然と背筋をそらした状態になり、完全に露出した乳房がさらに強調される。

「いやあ、離して！ やめて！」

美紀は必死に身をよじったが、硬く固定された腕をほどくことはできなかった。かわりに、たつぷりと量感のある二個の肉の球が上下左右に大きく揺れる姿が、観客たちじつくりと観賞されてしまう。

ストーリーテラーの言葉の魔力で膨張した胸は、重力に対抗してまるやかに美しい球を形作っている。柔肉の頂点には淡い桃色の乳輪がふつくらと盛り上がり、その中央にしこつた乳首が立っていた。

やはり、大きさが変わっている。小さめだった乳首が何倍にもサイズを増して、硬く屹立しているのだ。ふるふると脈動する乳首は、見るからに敏感そうなので、美紀本人の目にもいやらしく映った。

——…こんな、こんな、変えられた胸を大勢の人の目にさらすなんて、恥ずかしい。

死んでしまいたい……

大きくされた乳房を見ているだけで、美紀の眼から涙があふれ、紅潮した頬を伝い落ちた。しかし、羞恥に泣いている間にも、乳房の中ではずくずくとした熱い疼きが止まらない。乳首がまだ成長しているようだ。わずかな空気の流れですら、過敏な先端で感じてしまっている気がする。

「あなたのすさまじく卑猥で快楽に貪欲な胸が、ますますだらしなくなるように、私から贈り物をしてあげよう」

ストーリーテラーがズボンのベルトに下げた紐から、右手だけで金属のリングを二個、はずした。黄金色にきらめくリングは、指輪の幅を広くした形で、輪というよりも短い管というべきものだ。刺青の怪人が手品師を思わせる手つきで、美紀の顔の前でリングを一度回転させると、一個を右の乳首にはめた。乳輪にまで押しこむように、リングを乳首の根本まで進める。

「あひいっ！」

乳首全体がきゅっと締めつけられた。本来ならかなりの苦痛を感じるはずだ。だが、リングをかけられてさらに勃起した乳首で、激烈な快感が爆発した。硬くなったクリトリスを指でつままれたときの快感に似ている。だが、快楽はもつともつと強烈だった。まだほ

んの一ヶ月前に絶頂を知ったばかりの、未開発な美紀の肉体では、これほどの悦楽は得られないはずだ。この快感こそが、ストーリーテラーのオフビート能力の証なのだろうか。

「たまらんだらう。このリングはただの飾りではない。古代バビロンの淫秘術によつて製造された、女哭かせの責宝具だ。これをつけているかぎり、ずっと最高の刺激を与えられつづけて、なにも知らぬ幼女でも喜悅の涙を流す。ましてや、あなたの淫乱極まりない乳首では、さらに快楽が倍增して、天にも昇る気分だらう」

「そ、そんな、あ、これは、あなたがしたことで、うっ、はああ、うう……」

——片方の乳首だけで、こんなを感じるなんて……もう一個をはめられたら、わたし、どうなってしまうか……——

甘美な恐怖はすぐに現実となった。細い指につままれた金色のリングが、左の勃起乳首にも迫ってくる。

「もう、ひとつだ」

「や、やめて、やめてください、ひいっ！」

左にもリングが押しはめられた。もうひとつの胸からも、衝撃波にも似た快感が伝わってくる。

「くうっ、だめ……はああ、あんん……」

美紀はじつとしていられず、吊り下げられた上半身を大きくくねらせた。乳房が揺れ動き、またさらにリングからの刺激が身体にじんじんと反響する。

「ああ、あ、だめ、だめえ」

「だめなら、どうするつもりだ」

「取って。お願い、リングを取ってください、ああはあ……」

ふいに、美紀の両腕が自由になった。ストーリーテラーが左手の長い指を開いたのだ。美紀はすぐさま両手の指で、左右の胸の金のリングをつかむ。

「あひいっ！」

リングを抜こうと指で引いたとたん、乳首で凄絶な快感が弾け、美紀の目の前に白い炎が閃いた。純白の翼が頭上で震える。

しこった肉に食い入る二個のリングは、少しもずれていなかった。

「……そ、そんな、どうして、取れないの」

美紀はおそろおそろ慎重に、もう一度リングにかけた指に力を入れた。

「くふううっ！」

わずかな力を与えても、リングが放出する快楽の衝撃は変わらなかった。左右の胸から背筋へ、熱い電流が駆け上がってくる。

「あつ、おとお……」

脳そのものが痺れるような余韻に浸る美紀の耳に、さらにおぞましい男の言葉が入った。

「あなたの身体には、もつと淫らで貪欲な肉の突起がある」

「……あ、ああ……」

「あなたのクリトリスは乳首以上に大きく、より深く激しい快楽を生み出し、あなたを喜びの海へと沈める」

言葉だけでは、美紀には意味がわからなかった。革のソファの上で力なく開いた自分の内腿の間へ、ストーリーテラーの右手がのびて、初めて気づいた。

「待つて。そこは、あうんっ！」

右の乳首リングを、左手の人差し指で弾かれた。美紀は悲鳴に近いよがり声を発して、またソファの背もたれに倒れこむ。スカイブルーのボディスーツに包まれた腰だけが、まるで男に捧げるように持ち上がった。

太腿は汗に覆われて、アリーナを照らすライトの光にきらきらと輝いている。本来のスノーウイングのコスチュームは濡れてもほとんど変化がない材質だ。しかし美紀がいま着ているものは形だけ似せた模造品にすぎない。立体映像には、股間にべったりと染みが広がっている様子がアップにされていた。

体内に燃える欲情の炎と、乳首リングから受けつづける激しい快樂責めに反応して、すでに美紀の秘部はとろとろに蕩けて、女の蜜を吐き出し出している。

「もう、こんなに濡れているな。おそろしく淫らな肉体だ」

「違います！ これは、みんなあなたの、んくうっ！」

抵抗の言葉も、喘ぎにふさがれた。刺青の入った親指と人差し指と中指で、薄い布の上からの確に女の最高の急所をつままれる。

カッ、と股間の一点に業火が灯った。

「うあっ！ あっあああ……」

細い指先が繊細な動きを見せるたびに、青い布が内側から押し上げられる。布が盛り上がるにつれて大きくなる肉の悦楽に、美紀はのたうった。

湿った音を鳴らして、股間を隠す布にほころびが走った。裂け目からとろりとした愛液があふれ出るとともに、美紀がいままで二人の男にしか見せていない秘密の花園が露出する。

「いやあああっ！ 見ないで、見ないでえっ！」

美紀は絶叫して、まぶたをきつく閉じるしかなかった。自分の女性器が、頭上の立体映像に映し出され、自分の身長よりも大きく拡大されて見世物にされている。自分の意思に

反して、秘花はすっかり開花していた。充血して厚みを増した花びらが食虫植物のように蠢き、透明な蜜が下にいる美紀本人へ向けて滴り落ちる。

想像を絶した最悪の恥辱に、美紀は心を閉ざそうとした。だが、それすらも哀れな闘士には許されなかった。

「さあ、欲深いあなたへ、もうひとつの責めリングを与えよう」

「んああっ！」

股間からの強烈な雷撃に、美紀は目を見開かされてしまう。思わず覗いた自分の下腹部に、膨張した胸よりも信じられないものが存在していた。

濡れた女性器の上部に、親指の先ほどのサイズになった肉色の突起がある。見るからに硬く張りつめて、いまにも破裂しそうな印象を与える肉突起の先端に、黄金のリングが押しつけられている。

「まさか、こ、これが、わたしの」

美紀の陰核はかなり小さいほうだ。キャプテン・スカイにたっぷり愛撫され、果てたときでも、包皮から少し顔を出す程度だった。

「それが、あなたのクリトリスだ。最高にいやらしく、とびきり淫猥な、どこまでも恥知らずのクリトリスだ」

魔力を持つ言葉そのものを肥大した女の芯に刻みこむかのように、女責めのリングが一気に根本までではめられた。周囲に残された包皮がめくれ上がり、美紀はもつとも敏感な急所をがちりと捕獲されてしまう。

「ああつ！ あんんんっ！ だめっ、だめええっ！」

快樂という名の絶望が、美紀を絶叫させた。肉体の限界を超えた快樂に嬲られて、全身が波のようにならねり、リングのはまった左右の胸と腰がガクガクと上下に大きく揺れる。

背中の翼がでたらめに動きまわり、ソファに張られた黒いレザーを切り裂いた。椅子の中から詰め物が飛び出し、翼に煽られてステージの上を舞い散った。

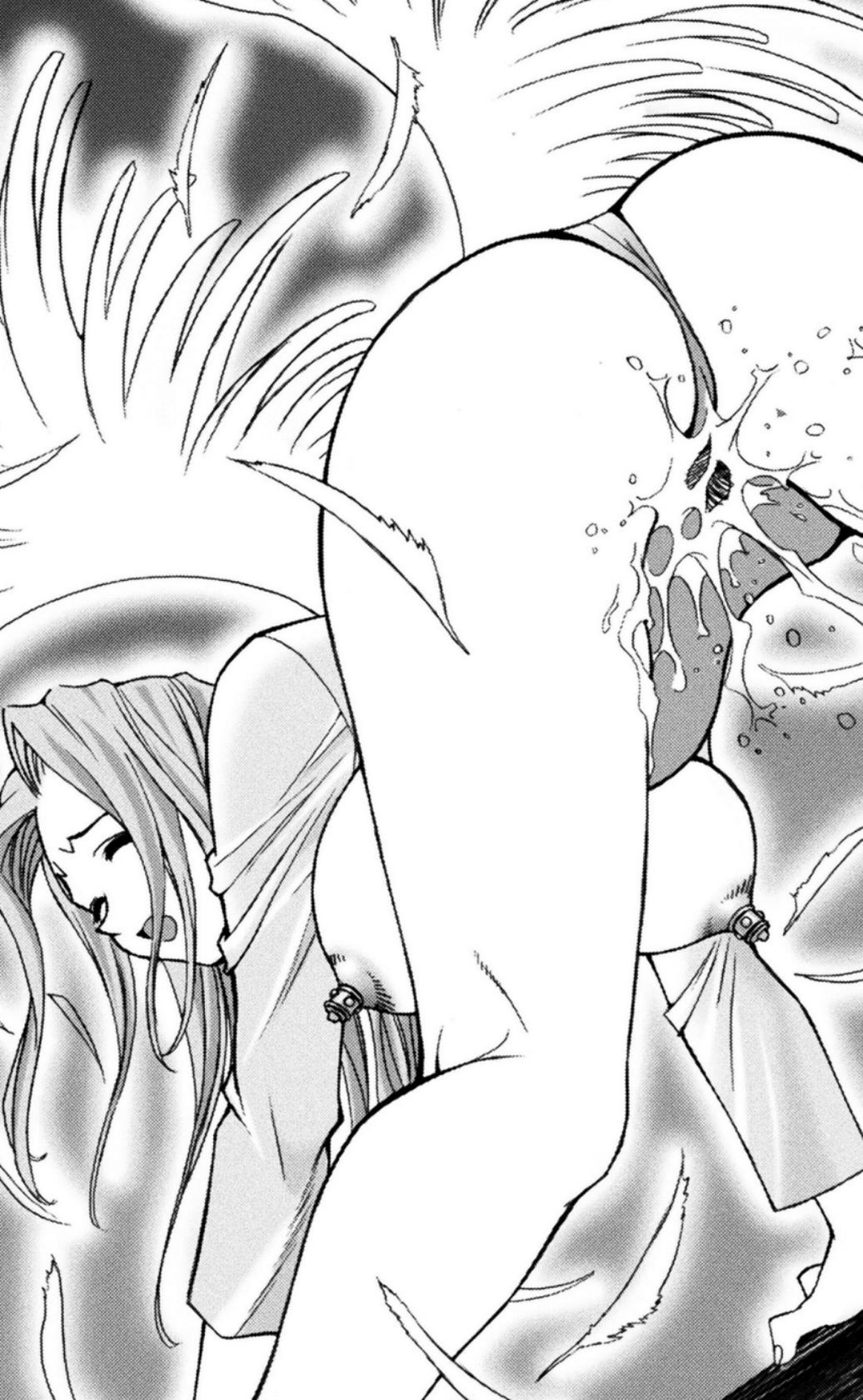
「ひいつ、んんんっ、わたし、わたし、だめえええっ！」

翼が背もたれを強く打ち、中の木材が二つに割れた。四本の脚がへし折れ、美紀を乗せたソファが床に倒れる。

床に投げ出された美紀は、四つん這いになり、息もつかせない快感に追われて、無意識のうちに高々と尻を掲げた。観客に向けて捧げる姿勢になった尻が、上下左右に振りたくられる。

翼が白く輝き、光る羽毛が空中に舞い踊った。

自分がどこにいるのかも、あさましい姿を大勢の見知らぬ男たちの視線にさらしている



ことも忘れて、美紀は最後の言葉をほとばしらせた。

「ひいっ！ イクっ！ イクイクイク、イツちゃうううっ!!」

まだ一度も触られてもいない女の源泉から、美紀は愛蜜を噴出した。失禁したのかと思わせる量の体液が、ステージから客席の最前列へ向けて放物線を描く。いわゆる潮を噴く状態だ。女の射精とも呼ばれる、最高の快樂の証だ。

秘蜜の放出が途切れると、美紀の手足から力が失われた。自身の肉体が絞り出した愛液と汗と涙と涎に濡れた床につつぶしてしまふ。

「はあ、あああ……」

快樂の山頂を越えて、うなだれる美紀の中で淫猥な炎が小さくなりかけたとき、新たに非情な命令が下された。

「あなたの肉体はまだ収まらない。欲望は飽きることを知らず、新たな快樂を求め、貪りつづけるのだ」

床に伏せた美紀の尻が、ビクンと跳ね上がった。

ステージに押しつけられてつぶれた豊乳の先端で、また鮮烈な喜びが走る。乳首の女哭かせのリングが床にこすれ、きりきりと乳首を責めたててくる。

「はうう、うあつ、ああ、また……んんう、もう、やめて……」

マダム・スクロールは四人の中で、唯一全身を覆うロングドレスを着ていた。しかしドレスの生地は黒いメッシュで、熟女らしい妖艶な肉体が透けて見える。ドレスの下には下腹部に食いこむ極小の黒いバタフライパンティのみ。熟れた豊満な胸はすそ野から乳首の先端まで、メッシュ越しにはつきりと見える。美紀たち若い三人には醸し出せない、淫靡な雰囲気을放射する姿態だった。

四人の女性ヒーローたちが、ステージ中央で黄金マイクを持つミルククラウンの前に集められた。美紀はたまらず顔をそむけてしまう。いつも訓練を受け、ヒーローとして生活することのアドバイスをもらい、ともに闘った先輩の悲惨な姿を目にするのは、自分の恥態を見られる以上につらい。

うつむく美紀に、先輩二人の力強い激励がかけられた。

「逃げてはだめだよ、美紀ちゃん」

「けっしてあきらめず、希望を失わない者こそが、ヒーローになれるのですわ」

ジャステイス・サーカスのメンバーの言葉は、ステージに仕掛けられたマイクが拾い、観客にも流される。いかにもヒーローらしい言葉に対して、客席の悪党たちから嘲笑や侮蔑の言葉が投げつけられた。渦巻く罵声を、さらにミルククラウンの軽快なしゃべりがかき分けた。

「さあ、皆様、お待たせいたしました。再び、ステージに四人の闘士がそろいました。まずはメインイベントに入る前に、先輩闘士の二人に、新人への手本を見せていただきますよー！」

マダム・スクロールの背後に、ストーリーテラーがまわった。艶かしい女魔法使いの顔に嫌悪と緊張が走る。同じ魔法系のオブビートとして、別の魔法使いの手にかけられるのは、他の者より苦悩が深いのだろう。

「今日も、いつものようにあなたの肉体のいやらしさを、大勢の目にさらすのだ」
背後からのばされた刺青の両手が、左右の胸をきつくつかんだ。

「んむっ！」

びくっ、とメッシュに浮かぶ、熟れた裸体が震える。シースルーのドレスの中で、もともと大きな乳房がさらに張りを増した。ステージの上の空間にまた立体映像が投影され、マダム・スクロールの乳房の変化が拡大して映されている。

美紀と志野は思わずマダムに駆け寄ろうとしたが、用心棒が鎖をつかんだ首輪と、リングと針が強制する快感に阻止されてしまう。シルバーバレットは、この場ではどうにもならないと熟知しているのか、ただ唇を噛みしめている。

ストーリーテラーの手が、乳肉の山をじっくりと刺激しながら登攀とうはんしていく。

「もっと淫らに、もっと食欲に、あなたは自分をさらけ出していく」

「ううっ……あふ……」

二つの肉球の先端で、極薄のメッシュが持ち上がった。しこり立った乳首が、内側から生地を押し上げているのだ。乳房全体がメッシュの網目にこすれて、さらに甘美な刺激を熟女に与える。

「もっとも淫乱なところを見せるのだ」

虫の足を思わせる指が、屹立した二つの乳首がつかんだ。硬くなった桜色の肉を、指先がきつく上下から揉みつぶす。

「おおあ……」

指の間から覗く乳首が、一気に長さを増した。通常の勃起ではない。あきらかにストリーテラーの魔力によって、いままさに肉体が改造されているのだ。

いきなり美紀は、用心棒に首輪をつかまれ、顔をマダム・スクロールの胸の前に突き出された。

「な、なに、ああっ！」

「おおうっ！ イ、イクっ、イキますわ！」

押しつぶされたマダムの乳首の先端から、純白の液体が噴き出した。メッシュの隙間を

抜けて二筋の液体が飛び、美紀の顔にぶつかる。

「うぷつ、こ、これ……」

美紀の口に、ねばついた濃厚な液体が染み入ってくる。舌の上に、ねっとり甘い味覚が広がった。いままで口にしたどんなケーキやデザートよりも美味な、舌が蕩ける甘露だ。「これは、マダム・スクロールの母乳なの？」

「そ、それは、あうんっ！ また、イッちゃいますう!!」

またストリーテラーの指が左右の胸を揉み絞った。再び、二つの乳首から同時に白い甘露が飛ぶ。メッシュの網をもともしないでまっすぐに飛ぶのだから、かなりの量と勢いだ。

「はあああ……うんん……」

陵辱者に乳房を握られたまま、マダム・スクロールの身体がくたくたと崩れ、黒いバタフライがきつく食いこんだむっちりした熟尻を床につけた。

美紀は啞然として、熱い吐息をつくマダムと、その胸を見つめた。しこったままの乳首からは、まだとろとろと母乳が滴っている。

——母乳の出方がおかしい。母さんも姉さんも、こうじゃなかった——

本来は、乳首には複数の細い乳腺があり、同時に母乳が出る。しかし、美紀の眼前にあ

るマダム・スクロールの乳首はまるで男の射精さながらに、肥大した先端の一点から大量の母乳らしきものを放出したのだ。

美紀の疑問に答えたのは、マダム・スクロール本人ではなく、司会者だった。

「常連のお客様はよくご存知でしょう！ ジャスティス・サーカスのセクシー最終兵器マダム・スクロールは、われらがストーリーテラーの言霊により、巨乳の内部まで作り変えられております。その垂涎もののボディの中でも豊満な胸こそが、偉大な魔法使いの最高の性感帯であり、性器そのものなのです。マダム・スクロールは胸を弄ばれるだけで、絶頂に達します。絶頂に達するたびに、特製のミルクを射精さながらに出します」

一拍置いて、ミルククラウンの声がつぎの犠牲者の名を呼んだ。

「つづいては、通なお客様に大好評のシルバーバレットの魅惑の肉体を、お楽しみください！」

身体を緊張させるスピードスターの背後へ、司会者のテンションとは対照的な雰囲気のカリスマがひっそりと進んだ。シルバーバレットがきつく拳を握りしめると、肘から先が消えた。怒りと屈辱のあまり、無意識に両手が高速で震えたために、人間の視力では捉えられなくなったのだ。この拳が人体に触れれば、一瞬で相手は破壊されてしまう。

しかし、言葉の呪術師はまったく恐れ気なく、背後から右手をシルバーバレットの露出

した下腹部へとまわした。陵辱者を傷つけないために、高速振動していたヒーローの腕がぴたりと静止した。シルバーバレットの肉体は、完全にストーリーテラーの支配下にある。「あなたの隠している本性を、今日も皆に見せるのだ。いやらしく、あさましく、快楽にだらしない美しい本性を見せるのだ」

陰鬱な言葉を語りかける男の指が、女のもっとも敏感な部分をつまんだ。

「うああっ！」

女らしい身体つきに反して、いつもボーイッシュな気丈さを見せるシルバーバレットが、女そのもののような喘ぎ声を上げた。ゴージャルをつけた顔が左右に振られ、自慢のポニーテールが激しくなびく。

また美紀は首輪をつかまれて、シルバーバレットの腰の前に顔を突き出させられた。やはり世間にはあまり知られていない志野よりも、テレビの人気者である美紀を虜めたほうが、観客の受けもよいのだろう。

「う、嘘です、こんなの……」

美紀は思わず、アナウンサーには不適當な言葉を口にした。目の前で現実に行っていることを、つい否定してしまったのだ。

刺青の指がつまんだ肉芽を上を引っぱると、まるで土に埋まった棒を引き出すように、

肉の突起が一気に大きくのびた。それは美紀自身が施された、陰核の膨張などではなかった。シルバーバレットの女性器の上端に生えているものは、もはや女のクリトリスではなく、別のものへと変化している。

美紀は息を呑み、いまにも顔に触れそうな肉棒に見入ってしまった。

——お、男の人の——

形状は完全に勃起したペニスだった。美紀が目撃した中では最大であるキャプテン・スカイの逸物にも勝るとも劣らない、雄渾なサイズの肉棒が、いまにも爆発しそうにふるふると脈動している。

「すばらしい！ なんともうらやましいこの巨根をご覧ください！ シルバーバレットはこの立派なペニスで、何人もの美女を泣かせてきたのです。しかも、彼女のペニスの感度は、通常の男の何倍も高い。すぐに絶頂に達して、いくらでも射精しながら、萎えることを知らない便利かつ理想的な肉棒でございます！」

司会者が感嘆の声を上げる中、ひくつく女の亀頭を、ストーリーテラーの指がきつく握りしめた。

「あなたの本性を、たっぷりと吐き出すのだ」

「ああああ——っ！ 出る！」

必死に女を責める男のように、シルバーバレットの腰が前後に動いた。

美紀は用心棒に頭を押さえられ、無理やり先輩ヒーローのペニスの先端に顔を寄せさせられた。いまにも唇が触れそうな位置で、口を強引にこじ開けられた。

「あがつ、ああつ」

——まさか、まさか、わたしに——

立体映像に、剛直と対面する美紀の横顔が拡大投影される。

本来存在しない男の勃起をいたぶられ、シルバーバレットが最後の声を上げた。

「出ちゃうう、ごめん、美紀ちゃんを汚してしまう、あんつ、出るっ！」

最速のヒーローの鍛えられた尻たぶが、強く引きしまった。美紀の口の前で、立体映像の中で、亀頭が一気にふくれ上がる。

「うあああああつ!!」

先端の切れ込みから、どつと白い粘液が噴出した。

「んううううっ!!」

まぶたをきつく閉じた美紀の口の中に、大量の精液がそそがれる。吐き出そうとしたが、口と鼻を大きな手でふさがれた。

「むぐっ、んんっ、ぐうう……」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売!



2次元
**ドリーム
マガジン**
2D DREAM MAGAZINE

コミック O M I C
UNREAL
アンリアル

**敗北乙女
エクスタシー**
Defeat Maiden Ecstasy

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

新刊 姫騎士

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル!



小説家になるこの男性向けサイト「アクトアインノベルズ」から書籍化!

姫騎士 クラスメイト!

戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル!

リアルドリーム文庫

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ



あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の外伝作品もあり! 電子書籍でしか読めないオリジナル



ドキドキラブなハイレム系ライトノベル!

二次元ぷち文庫

二次元ドリーム文庫